

# 研究

## パレトと國際貿易政策の經濟論

手塚壽郎

- 一、世紀末に於ける保護貿易主義流行の原因に就いてのパレトの見解。
- 二、保護貿易乎自由貿易乎の問題。
- 三、保護貿易乎自由貿易乎の經濟論。

—

自由貿易主義は、*monumentale* であるところの一八六〇年の英佛協約に、最初の具體化を見せた。實に此協約は、其後に出てたあらゆる通商協約の模範となり、自由貿易の運動は一世を風靡する概があつた。然し此運動も一八七七年を一轉機として、極端なる保護貿易主義の運動と變化したのであつた。一八七七年以後、露

西亞、西班牙、伊太利、奧太利、ルーマニア、瑞西、殊に獨逸は一八七九年に、相次いで自主關稅制度を確立し、關稅率の引上を執行した。當初此運動に捲込まれること甚しくはなかつた佛蘭西も、一八九二年を一轉機として、著しい保護貿易主義の展開地となつた。自由貿易主義を誇つた英國さへ、二十世紀の初頭に於て、保護貿易主義への一步を踏み出さうとしてゐたのは、こゝに記すまでもない衆知の事實である。

此保護主義への運動の轉向は、一般に如何なる原因をもつのであるか。パレートは、此原因を如何なるものを見たのであるか。

もとく／＼パレートによると、人々の具體的なる行動は、彼の所謂客觀的並に主觀的なる種々の要因の種々なる割合の混合から出て來るのであつて、彼の用語を用ふれば、人の行動は綜合的 *synthétiques* である。(註一)それらは論理的行動 *actions logiques* と非論理的行動 *actions non-logiques* とに大別せられるけれども、これが行動の嚴密な分類でないのは勿論、論理的行動も必ずしも客觀的要因に基く行動ではないのである。經濟學によりて研究せらるゝ人の行動は論理的行動であるとパレートは云ふけれども、それらも *en très grande partie* 於てはあにるに過ぎない。(註二)それらは或部分に於ては非論理的である場合が多い。換言すればそれらも、「主として或心理的狀態即ち感情、潜在意識から來る」(註三)場合が多いのである。従ひて世紀末に於ける保護貿易主義來復の原因に就きては、パレートは一元的説明を與ふることなく、凡そ次の如き四つの説明を與へてゐる。

(註一) Pareto, *Traité de sociologie générale*, t. I, p. 66.

(註一) Ibid., p. 68.

(註二) Ibid., p. 76.

一、保護より出づる直接的にして著大なる結果を得ようとする者の主張に因り。即ち永久地代を得んとする地主、利潤——これは一時的に過ぎないが——を得ようとする企業者、又は保護せられ得る職業に従事する人々の主張によりて。

二、保護による財政収入によりて財政を豊富ならしめんとする政治家の主張に因り。又は國家が費すであらうところの經費を利用せんと欲し且つ此經費を増加するには歳入を増加せねばならぬと考ふる *intelligents* なる人々の主張に因りて。

三、國家主義的感情に燃え、保護貿易は、外國に對し一國を防禦するに役立つと信ずる人々の主張によりて。また關稅による保護の場合には少數であるが、他の制限的保護方法の場合には多數である倫理道德論者によりて。

四、少數ではあるが、見識ある人々であつて、デモクラシーを除々に富者から奪ひとらんとしながら、然し直接にブラヂョアジ—に對抗する意志も、勇氣も、力もなく、たゞ迂回的方法を用ひて、それを得んとする人々の主張によりて。(註)

(註) Pareto, *Manuel d'économie politique*, pp. 520—521.

## 二

右は十九世紀末より二十世紀の初頭に於ける保護貿易流行の原因に就いてパレットが與へた説明であるが、一國全體の利益の觀點に立つて見るとき、保護貿易が有利であるか又は自由貿易が有利であるかは別の説明を要する。ところで、自由貿易が有利であるか保護貿易が有利であるかと云ふ形に於て一般的に問題を提出するとき、パレットによれば、此問題は解法不能である。けだし保護貿易又は自由貿易による利害は種々なる觀點から考ひ得るからである。

一、富の分配の觀點から。保護貿易は個人間の富の分配を明らかに變化する。生ずるところの分配の組み合わせは無限である。一般的に云へば、農業保護の貿易は地代を増加して、地主に利益を與へる。工業の保護貿易は工業用の土地々主に利潤を與へ、企業者に利益を與ふ。企業の利潤は、他の企業者の競争を誘起し、次第に消滅する。又それは、保護せらるゝ事業の熟練労働者の賃銀を高めて、此らの人々に利益を與へ、保護せられざる事業又は農業に従事する者に損害を與ふ。また自由職業に従事する者に利益を與へる。けだし工業は、農業に比し、技師、辯護士、公證人等の知識階級をより多く要するからである。

二、社會的影響の觀點から、農業國に於ける工業の保護貿易、工業國に於ける自由貿易は、同様に工業を發展せしめる。従ひて此ら反對の方法が、國を異にする場合には同様の影響をもつことが出来る。即ち労働者階

級の勢力、デモクラシーの勢力、社會主義の勢力を増大せしめる。

農業の保護貿易は、地主たる貴族が存在する場合には、此勢力を増大し、此階級が他の貴族のために壓倒せらるゝを妨げる。

三、財政上の影響の觀點から。現代に於ては、純粹に且つ單純なる保護貿易はないのであつて、總ての國家は關稅の徵收によりて莫大なる歲入増加をなさうとしてゐる。(註)

(註) Pareto, Manuel d'économie politique, pp. 517—519; Traité de sociologie générale, t. 2, pp. 1412—1421.

かやうに種々なる觀點から、自由貿易又は保護貿易の利害を考ふることが可能であるが、此らのほかに、特に經濟的利害の觀點が重要であらうことにも疑はない。

### 三

此經濟的利害の觀點も、經濟的直接的利害の觀點であるか、間接的利害の觀點であるかの二つに分けられ得る。

間接的影響のうちにはフリードリツヒ・リストが明らかにした有名な一つがあるが、これは想像された影響であつて、Heelの影響ではない。リストは、保護貿易が幼稚産業を保護するに有用であつて、産業が發達すれば不必要となるべきことを、主張した。アプリオリには、然ることがあり得るのは否定出来ないが、パレット

は、かゝる實例は一つも無いと云ふ。保護の下に興つた産業は常に益々保護を要求して、保護を不必要とする  
と自ら宣言したことが無いと云ふ。(註)

(註) Pareto, *Manuel d'économie politique*, p. 516.

直接的經濟的利害は、貿易によりて生ずる國際分業に基因する經濟的得失の問題である。此問題に就きては  
既に、リカルドによりて提唱せられ、ミルによりて完成せられた比較生産費學說がある。此理論の骨子をリカ  
ルドは次の表現を用ひて云ふ、「されば、機械及び熟練の上に於て餘程の優越を有し、従つて諸貨物を隣國よ  
りも遙かに少量の勞働を以て製造し得る國が、是等の貨物と交換に其消費の爲めに要する穀物の一部分を、自  
國の土地が、穀物を輸入し來る其先の國よりも肥沃であつて、穀物をより、少き勞働を以て作ることの出來る  
場合にも、猶ほ之を輸入し得るといふことが分明となるだらう。二人の人があつて、兩者共に靴と帽子とを造  
ることを能くし、而して一方の方の人は何れの仕事に於ても優れてゐるが、帽子の製作に於ては、彼は其競争  
者を凌ぐこと五分の一即ち二割に過ぎず、靴の製作に於ては、その能く彼に勝つことは三分の一即ち三割三歩  
である場合、優れる者が専ら靴の製作に當り、劣れる者が帽子の製作に當ることは、兩者双方の利益ではない  
だらうか」と。(註一) 此例からリカルドは、二個の外國市場が交換をなすときには、一國は他國より、安く  
生産し得る總ての商品を輸出することなく、たゞ二市場の比較生産費の差の大なる商品のみを生産し輸出する  
を利益とするとの一般的結論を導き出した。右のリカルドの例を引けるバスターブルは、「二人の勞働者が其

結合から利益を得らると知るには、簡單なる計算をなせば足る」と附け加へてゐる。(註二)ひとり古典派の學者のみならず、殆んど總ての經濟學者は此比較生産費理論の妥當性を疑ふことがなかつた。福田徳三先生の如きも、此理論の論據を其まゝの形に於ては打破ることは出来ないと言明されてゐる。「ソコデ彼等(古典派の學者ら)は尙一步進めて、それであるから貿易が行はれ、優れて居る中でも殊に優れたものに専ら力を盡し、劣つた國は劣つたなりに、劣つた中では比較的優つたものゝ生産に全力を注いで、それ〴〵の分業をする。是れは一般に世界全體の利益となると主張するのであります。所で、此くの如き國際分業を行ふには、保護政策で無暗に關稅を設けては、分業が圓滿に行はれない、自由貿易にしなければ可けない。幾ら保護政策で障壁を拵へたつて、自國に於て一切合財拵へると云ふことは決して利益でない。それよりは寧ろ自國に於て優れた或る物の生産に力を注いで、他の物は外國から買ふ方がよいのである。無用な關稅の障壁を拵へて、外國の輸入を制限したり、或ひは禁止したりすることは、自分の利益を殺ぐものである。是れ自由貿易主義の不可動的眞理たる所以であると主張するのであります。是は學理上中々確かなる論據であります。今日と雖も、此論據を其儘に打破ることは出来ないであります」と。(註三)

(註一) リカアドオ、經濟及租稅原論、小泉信三譯、古典叢書版、一八二頁。

(註二) Bastable, The Theory of International Trade, p. 14.

(註三) 福田徳三、流通經濟講話、九二三—四頁。

パレットは此比較生産費説の妥當性を吟味し、貿易政策の經濟的直接的利害の問題を解くのである。パレットの結論から先に云へば、比較生産費理論は、可能なる場合を示してはゐるけれども、必然的な場合を示すものでないと云ふ。換言すれば此理論に據れる國際分業は必ずしも各國の財の獲得量を増加するものではないと云ふ。パレットは此結論を證明するために、リカルドと同様の例を作る。今リカルドが例示する二商品を夫々A、Bとし、より巧ならざる労働者（又は國）甲が一日にAの一單位又はBの一單位を生産するとする。リカルドの例に従ひて、より巧なる労働者（又は國）乙は一日にAの $\frac{6}{5}$ 又はBの $\frac{4}{3}$ を生産するとする。之を表にて示し、次の如くであるとする。

	甲國	乙國	
A 商品の生産高	6	1	
B 商品の生産高	$\frac{4}{3}$	1	

此ら二國が各A商品の生産に三十日を投じ、Bの生産に三十日を投ずるとき、二國の欲望が満足せらるるとすれば、

	甲國	乙國	生産合計量
(a) A 商品の生産高	36	30	66
B 商品の生産高	40	30	70

である。



次に同じくリカルドに従ひ、甲國がBのみを生産し、乙國がAのみを生産するとすれば、

	甲國	乙國	生産合計量
(β) A 商品の生産量	1	80	60
B 商品の生産量	80	1	80

である。由りて此場合には、二國の間に分配すべき合計量は、前の場合に比し、Bに就てはより多いのであるが、Aに就てはより少い。だから甲國及び乙國の欲望の状態如何により、満足の compensation がある場合もあれば、ない場合もあると考へ得る。Compensation があれば、リカルドの命題は正しいし、それがなければリカルドの命題は正當ではない。例へばAがパンであり、Bが珊瑚の裝飾品であるとすると、パン六單位の不足は珊瑚の裝飾品十單位により補償し得られないかも知れない。それ故にリカルドの理論が眞であるためには、甲國がAのみを生産し、乙國がBのみを生産し、且つ生産せらるゝ合計量が二商品共に、甲國乙國が共に二商品を生産し夫々の欲望を直接に充足する場合に比較して、より大でなければならぬ。例へば甲國が三十日の労働をAの生産に投じ、三十日の労働をBの生産に投じ、乙國は二十二日の労働をAの生産に、三十八日の労働をBの生産に投じたりとし、且つ——此點が重要であるが——二國の欲望が此様にして生産せられたる量によりて満足せられたりとする。然らば

	甲國	乙國	生産合計量
(γ) A 商品の生産量	36	22	58

— B 商品の生産高	40	38	78
------------	----	----	----

となる。此場合に較ぶれば、甲國がBのみを、乙國がAのみしか生産せざる場合は、生産合計量に於て右に示したる合計量よりより大である。従ひて二國はより有利なる分配をなし、より多くの量を受くるを得るは確かである。例へば次の如く分配し得られる。

	甲國	乙國	生産合計量
(a) { A 商品の生産高	37	23	60
B 商品の生産高	41	39	80

(a)は、二國の各にとり、(b)よりより有利である。

かやうにして、リカルドが國際分業によりて生ずるであらうと考ふるところの利益は、現はるゝことが可能であるけれども、必然ではない。故に國際分業の成立を妨ぐる保護貿易は、二國の双方にとりて、有利であり得るのである。(註)

(註) Pareto, *Manuel d' économie politique*, pp. 507—510. Cf. Murray, *Lezioni di economia politica*, seconda ed., p. 334; Boninsegni, *Manuel élémentaire d' économie politique*, pp. 439—441.

生産の物量と併せて價格の觀點から觀察すれば、國際分業の影響は如何なるものであらうか。いま先の(c)の場合に歸り、生産物の次の如き分配によりて、二國が共に夫々の欲望を満足し、且つ(c)の場合よりもより多くの満足を得てゐるとする。

		甲國	乙國	生産物合計量
(s)	A 生産物	29	31	60
	B 生産物	49	31	80

即ち甲國はBを増加し、Aの減少による満足の減少を補償し得、また乙國は二商品夫々の増量を得て、より多くの満足を得てゐる。此場合には、リカルドの結論が正しきがためには假定せられねばならぬ假定が置かれてゐるのであるから、リカルドの結論は勿論正しい。けれど二國が分業を行はずして、甲國がBの四十九單位を得ようと欲すれば、二十七單位九のAしか得られないし、乙國も三十單位のAと三十單位のBしか得られないから。

此場合に價格は一見次の如くなるやうに思はれる。

	甲國	乙國
A 生産物	31 29	1
B 生産物	1	29 31

だが二國に於ける價格は（運賃をゼロと假定する）同一でなければならぬから、次の價格が現はれる。

	甲國	乙國
A 生産物	31 29	31 29
B 生産物	1	1

これらの價格は保護貿易下に於ける價格

	甲國	乙國
A 生産物	10   9	10   9
B 生産物	1	10   9

よりより安し。

然し右の結論は可能なる一場合のことであつて、他の値を選べば、此結論は眞ではないであらう。例へば二國の慾望が組み合せ(0)によりて満足せられずして、次の組み合せによりて満足せられたとする。

	甲國	乙國	生産物合計
(0) A 生産物	28	32	60
B 生産物	46	35	80

此場合に現はるゝであらう價格は、保護貿易下に現はるゝであらう價格よりより高い。然し此場合には自由貿易の下に於ても結局は國際分業が行はれない。けだし甲國は自ら四十五單位のBを生産し、残りの労働をAの生産に投ずれば、三十一單位のAが得られ、従ひて、Bのみ生産して、其一部を乙國が生産せるAと交換するより有利であるから。此場合はリカルドの命題が妥當せざる場合である。(註)

(註) Pareto, *Manuel d'économie politique*, pp. 510—513.

右の證明は、パレットが例の形を以て或可能なる場合を簡明に示さうとしたものに過ぎない。パレット自ら云つ

たやうに、正確な證明は、純粹經濟學の數學的方式を用ふることなくしては、なし得られないのである。(註)

(註) Pareto, Manuel d'économie politique, p. 514.

此パレートの所論に對して、伊太利經濟學界の耆宿 Graziani は、ロリアが形容して「甚だ簡單で少しく理解し難い形に表現せられてはゐるが、極めて至當なる答辯」La risposta, sostanzialmente giustissima, al Pareto, è espressa in forma troppo succinta e poco intelligibile (註)と云ふところの、次の如き批評を加へる。

(註) A. Loria, A proposito di un trattato di economia politica. Nella Riforma sociale del 1907 e nel secondo vol. di Verso la giustizia, pp. 356. A. F. Burns, A Note on Comparative Costs, Quart. Journ. of Economics, May 1928 は悉くパレートを參考して書かれたのであらう。

「もしA國が國際貿易の發生以前に毛織物百單位と硫黄二百單位とを生産し、B國が毛織物五十單位と硫黄百五十單位を生産し、貿易の發生後にA國は毛織物のみを、B國は硫黄のみを生産すとすれば、合計して二百單位の毛織物と三百單位の硫黄しか得られない。ところでパレトによれば、五十單位の毛織物の消費によりて生ずる満足と、五十單位の硫黄の消費によりて生ずる満足と何れが多きかは、個人の欲望と便宜とに依存するのであつて、従ひて此場合には、國際貿易は當事國に眞の利益を齎らすとは、必ずしも云ひ得ないと云ふ。

「此パレートの結論は、甚だ巧妙に導き出されたものではあるけれども、私には認容し難いやうに見える。先づ二國共、五十單位の硫黄を生産するよりは、五十單位の毛織物を作るに、より多くの困難を感じる。だから五

十單位の硫黃を捨て、五十單位の毛織物を得れば、外國貿易により或量の勞働日數を節約することが出来る。且つ、總ての財の生産に優越性をもつ國は比較生産優越力のより大なる財の生産に自らを限定することなく、其活動力の一部を他の財の生産に向けることが出来る。右の假定に於ては、A國は二百日の勞働を毛織物の生産に投じ、B國は二百日の勞働を硫黃の生産に投ずるとすれば、合計二百單位の毛織物と三百單位の硫黃が得られる。然るにA國の毛織物の消費は百單位であるから、A國は此百單位を輸出する。これは硫黃の例へば二百五十單位と交換せられる。(A國の百對二百とB國の百對三百との中間の比率にて)然しもしB國がA國に二百五十單位の硫黃を與へなければならぬとすれば、B國は自らの消費を百五十單位から五十單位に減少せねばならぬ。そこでB國が之を變化せざらんことを欲すれば、硫黃の百五十單位だけを交換するに止めねばならぬ。而して此硫黃の五十單位は、百單位の毛織物對二百五十單位の硫黃の比率を與へられたりとすれば、毛織物六十單位と交換せられる。そこでA國は毛織物の生産を百六十單位に限定する。自らの消費のための百單位と硫黃の百五十單位を得るための六十單位に。次に、先に硫黃の生産に投ぜられたる百日の勞働のうち、只六十日が毛織物の生産に投ぜられ、残り四十日は硫黃の生産に投ぜらるゝであらう。こゝに八十單位の硫黃が生産せられる。結局に於て百六十單位の毛織物と三百八十單位の硫黃が得られる。然るに交換以前には百五十單位の毛織物と三百五十單位の硫黃しか得られなかつた。これによりて毛織物の十單位と硫黃の三十單位を利す。従ひて國際貿易の利益は疑ふことが出来ない。(註)

(註) Graziani, Istituzioni di economia politica, quarta ed., pp. 290—1.

また Genova 大學教授 Arias は、同様の批評をも含むところのより廣汎なる批評をなしてゐる。氏は先づリカルドの例は具體的例であつて、抽象的例でないことから氏の批評を始める。

「リカルドが採用し、バスターブルが認容せる例を支持するに當り、先づ以て我々が認め得るのは、リカルドが引ける例は具體的例であること、即ち第一次的必需品たる具體的財に關することである。リカルドは、殆んど相等しい order (ordine) のまた相等しい強度の人間欲望を満足する具體財を例にとつたのである。彼は彼の推論を、他の何らの制限的限界を設けることなく擴張などしてゐない。さればこそリカルドはパンと珊瑚とは云はない。靴と帽子に就いて云つてゐる。彼が帽子と靴の例をとつたのは、一般的に他の特別の條件なしに主張せんとするに非ずして、只此ら二人の労働者と此ら二つの商品のみ就いて主張しようとしたからである。

「然し疑もなくさうだとしても、記述せられた假定に於ても尙、個人の欲望に關し、一商品の豊富が他の一商品の一定量を補ひ得ないと云ふことは可能である。然し同じ order の欲望を満足する力ある商品を取扱へば、此可能性は、パレットがリカルドの具體的主張に代へた一般化に於てより、遙かに遠ざけらるゝことは、争ふことが出来ない。」(註)

(註) G. Arias, Principii di economia commerciale, 1917, p. 159.

次にアリアスはグラチアニの批評と同様の批評を展開する。

「だが右の批評とは獨立に、我々は、パレットの證明は、引かれたる例の場合と雖、比較生産費の相異がある場合に二國が生産の分業を行ひ、交換を行ふにより利益を得られないことを證明するものではないと、云ひ得る。まことにパレットの推論は、二商品の各に三十日宛投じたる二國が比較的優越性を有する商品の生産のみに尙三十日を投じ、其結果、分配すべき總量は一商品に於て、分業を行はざる場合に比し、より多いが、他の一商品に於て、より少いと云ふ假定に立つてゐる。然しもし二國が、二商品の一方の生産の減少が欲望の點から見ても他の一商品の生産の増加によりて補償せられないことを知るならば、彼らは分業の後には、此後の商品に三十日を投じないであらう。……實際に於て二國は夫々の商品の生産に特化し、交換のオペレーションを始める。只此特化と此ら操作とは夫々の需要の飽和點を越えて續行せられない。……要するに、生産が夫々の需要に一致せねばならぬと云ふ條件はリカルドの理論のうちに暗に含まれてゐる。」(註)

(註) Arias, op. cit., pp. 159—160.

アリアスは更に一步を進めて、勞働價值説に據れるを思はしむるところのデリケートな批評を、先に掲げて置いたパレットの次の表を掲げたる後に、述べる。

	甲國	乙國	生産合計量
A 生産物	30	22	58
B 生産物	40	38	78



	甲國	乙國	生産合計
A 生産物	37	23	60
B 生産物	41	39	80

「パレットは此後の組み合わせが前の組み合わせよりも二國の各にとりてより有利であることを自明であると考へてゐる。けだし各國は、分業の後には、各生産物の一單位宛をより多く得られるから。然し云ひ得ないであらうか、二國の欲望が前の組み合わせにより満足せられてゐるとの假定から我々は出發してゐるのではないかと。それ故に、此第二の組み合わせは、各商品の一單位宛を二國に多からしめたとの理由で、二國をより有利ならしめ、従ひてより望ましきものであると結論することは出来ない。けだしもし二國の欲望が、新しい一單位が加はる以前から完全に (satiement) 満足せられてゐるとすれば、二商品の一單位宛の附加は飽滿點を越えてより多くの満足を二國に與ふことが出来ない。

「分業が行はれてゐないときに既に欲望が完全に満足せられてゐると云ふ假定に於ては、右の第二組み合わせが第一組み合せに比較してより有益であるとの證明は出来ない。だから分業と特化とは、與へられたる假定の下に於て、二國にとりより有益であることは、眞理たるを失はない。けれどもそれは二國の間に分配せらるべき二財の量が分業により四單位増加せらるゝが故ではない。それは、二商品に對する夫々の國の欲望を完全に満足せしむるに必要にして且つ充分なりと想像せらるゝ量を、より少い犠牲を以て得ることを許さしむるが故で

ある。」(註)

(註) Arias, Principii di economia commerciale, pp. 168—9.

アリアスがなせる第一段の批評は、リカルドを救はんとする好意に富む批評ではあるが、彼自ら第二段の批評の當初にも述べてゐるが如く、絶對的な破壊力を有つものではない。「Egli non parla di 'pane' e di 'corallo', ma di 'scarpe' e 'cappelli'; e l'avere precisamente adoperato l'esempio delle scarpe e dei cappelli può significare che, nel suo pensiero, il Ricardo non intendeva di affermare in linea generale e senza altre specificazioni, ciò che di fatto egli afferma soltanto per quei due operai e quelle due merci. Certo è che, ad ogni modo, anche nell' ipotesi descritta, è possibile, anche per quelle due merci, in rapporto ai gusti degli individui, che la sovrabbondanza dell' una non compensi la deficienza dell' altra.”

第三段の批評は、アリアスがパレントの記述を誤解せることから出でしものぢめて、標的を失してゐる。パレントが表

	甲國	乙國	生産合計量
A 生産物	36	22	58
B 生産物	40	38	78

を掲げし、“Par exemple, supposons que I (甲國) travaille encore 30 jours à faire A et 30 jours à faire B; mais que II (乙國) travaille 22 jours à faire A, et 38 jours à faire B. De plus, et c' est là le point capital, supposons que les goûts soient satisfaits

par les quantités produites de cette façon. . . .”と云ふ場合には、此組み合わせによりて二國の欲望が飽和状態に於て満足せられてゐることを意味せしめてゐるのではない。換言すれば、こゝでパレットは、此組み合わせにより二國のA、B二商品に對して認むる限界利用がゼロとなつてゐると、云ふのではない。A、B共に或高さの限界利用を認められつゝ、二國の欲望の満足が相對的極大量となつてゐると云つてゐるのに過ぎない。然るにも拘らずアリアスは、此組み合わせによりて二國の欲望が飽和状態に於て満足せられてゐると云ふのがパレットの考へであるかの如く解してゐる。“Non possiamo dunque concludere che la seconda combinazione è più favorevole perché fa ‘star meglio’ i due individui, in quanto consente ad essi una unità in più di per ciascuna merce; non questo, perché se i gusti loro eran pienamente soddisfatti prima che quella nuova unità si aggiungesse, l’avenuta aggiunta di un’ unità dei due beni non può ad essi conferire una soddisfazione supplementare oltre il punto di saturazione.”アリアスの第三批評が標的を失へる所以はこゝにある。第一の組み合わせによりても二國の欲望が未だ充され盡してゐないとすれば、二生産物の量が何れも増加した場合に、満足がより大であるべきは、疑ふことが出来ない。またこれとは別に第三批評の最後の主張も成立することが出来ないと思ふ。なぜなら“La piena soddisfazione dei gusti di ambedue を得るに要する生産物の量はアリアスが豫想してゐるやうに一定であらうが、パレットが論じてゐるのは、一方の生産物の量が減少し、他方の生産物の量が増加する場合に關するからである。もしアリアスの主張を少しく變化して、パレットの主張を、リカルドが立脚するところの労働價值説の立場から批評し得ざるべきか否かの問題となすなら

ば、問題は異つたものとならざるを得ないのである。

アリアスの第二段の批評はほゞグラチアニの批評に等しいものであつて、パレットの批評としては或意味に於ては正當であり、或意味に於ては不當である。パレットの所論は Alberto Breglia の所謂 “la duplice divisione del lavoro esclusiva” 又は “la rispettivamente esclusiva divisione del lavoro” (註一) を前提とするところのリカルドの理論の批評から出發してゐる。従ひてパレットの所論も此前提の上に立てられてゐるのであつて、此前提が撤去されるならば、パレットの理論が正當でないのは云ふまでもない。而してグラチアニらがパレットに對して加へた批評は、此前提を取り去つた立脚地に立つてゐる。(註二) パレット自身 Manuel d'économie politique の第五三二頁に於て、グラチアニが例示した場合の可能なるべきことを述べ、それが即ちリカルドの命題が妥當しない證據であると云つてゐる。リカルドの命題が國際分業により生ずる生産物の量の増減に關する限り、たしかにパレットが云ふが如くである。だがパレットの問題は保護貿易か自由貿易かの經濟論にあるのであるから、此場合の出現に保護貿易政策を必要とするか否かの問題が残されてゐると思ふ。

(註一) A. Breglia, Divisione del lavoro e scambio internazionale, Giornale degli economisti, maggio 1929, estratto, p. 13.

(註二) 古典派の比較生産費説に對し、大、小二國の存在を假定して、Haberler がなしたる批評は、グラチアニらの批評のモヤモヤトシシヨニに過ぎない。Cf. Haberler, The Theory of Comparative Cost, Quart. Journ. of Economics, Feb. 1929,